

◎1962年フルブライト同窓会開く



学生時代のような熱気を秘めた1962年同窓会の面々

1962年フルブライト同窓会が、93年2月18日、18名が出席して、東京ステーションホテルで開催された。

小林昌彦氏(元毎日放送ニュースキャスター)の司会で始まり、長坂健二郎氏(万有製薬)の発声で、参加者の健康を記念して乾杯した後、フランス料理を味わいながら、近況を語り合い、旧交を暖めた。

アメリカではクリントン政権が発足した直後にあたり、席上、メインスピーカーとして桐潤利博氏(オムロン)により、「21世紀への指針・日本の選択」と題してスピーチが行われた。

桐潤氏は、新しい変革の時代にあたり、日本の政治、行政、経営、教育など各分野において、日本版ベレストロイカが行われればならず、われわれ自身も傍観者ではなく、将来に向けて積極的に発言、行動すべきであると、広い視野から情熱をこめて訴えられた。

もともと当日の参加者は論客ぞろいであったせいか、岩潤氏のスピーチに触発されて、意見の表明が相次ぎ、司会者が困るほど活発な議論の応酬のうちに、予定の時間は過ぎて、あたかも30年前のオリエンテーションの時のような、若い熱気と刺激に満ちた一タであった。

時期が入試シーズンのさなかであったため、多数の大学関係者が出席できなかったことを反省し、次回は、各オリエンテーション・グループともれなく連絡をとり、より多くの参加者にとって有意義な充実した会とすることを申し合わせた。

なお、1962年フルブライト同窓会についてのご意見、お問い合わせはFAX:0466-22-9733(安<田中>成子)にお寄せください。(正野敏夫)

編集後記●昨秋に編集作業を引き継ぎました。1989年度のジャーナリスト・プログラムで1年間、ロサンゼルスに遊びました。本業は雑誌編集者、ということで、ふだん仕事でやっていることだから、と深慮なく引き継いだところ、予定より半年ちかく遅れてしまい

ガリオア・フルブライト東京同窓会事務局

〒102 東京都千代田区二番町9-2 電話(03) 3221-1841 FAX(03) 3238-0758

◎スペイン・フルブライト同窓会からの訪問者

93年春のことである。Dr. Estrella Rausell と名乗る女性から突然、電話をいただいた。スペインのフルブライターの一人で、和光市にある理化学研究所の研究プログラムに参加している。近く帰国するが、スペイン・フルブライト同窓会の活動の参考にするために、日本の同窓会の活動状況をききたい、とのことだった。喜んで会うことにして、4月末、日米教育委員会のヤン事務局長も交えて昼食をともにした。

スペインでは、最近、フルブライト・プログラムにスペイン人事院所管の国費留学生も統合されたため、フルブライターの数が多くなり、同窓会活動も次第に活発化しつつあるとのこと。日本のガリオア・フルブライト同窓会の活動には感銘を受けたようだったが、スペインではフルブライターがアカデミア主体のため、活動の中心は同窓生間の懇親、後輩の指導などにあるという。

Dr. Rausell は25歳の医学博士で、ニューロシステム



スペイン同窓会の Dr. Estrella Rausell (中央) を囲んで。右隣りが渡邊宏東京同窓会会長

の限界に挑んでいる。日本政府資金による基礎研究プログラム Frontier Research Program のもとで、人間の脳、電子などの先端分野に挑戦できることに感謝していた。ちなみに理化学研究所(科学技術庁所管の特殊法人)のこのプログラムは、15年計画で、年間予算は約30億円。4グループ、各グループ3、4チームで運営されている。参加者は各チームのリーダーが、国籍を問わず、適任者を選抜する。チームリーダーの半数近くが外国人で、メンバーの参加期間などすべてをリーダーが決定する、国際的かつ目的志向的なプログラムとのことである。(渡邊 宏)

ました。インタビューでヤンさんがおっしゃった「若い世代の同窓生」に、私も属するわけで、今回の編集作業を通じてようやく同窓会の何たるかを知りました。NEWSLETTER も、より幅広い世代が参加できるメディアにしたいと考えています。(西岡一正)



NEWSLETTER

No. 7

MARCH 1994

フルブライト計画の転機となった同窓会結成



インタビュー◎

JUSEC 事務局長を退任するカロライン・又野・ヤンさん

日米教育委員会(JUSEC)のカロライン・又野・ヤンさんが3月末で事務局長を退任する。「ヤンさん」の愛称でフルブライト・プログラム内外の関係者に親しまれた、いわばフルブライト・プログラムの「顔」。退任を前に二十余年におよぶフルブライト・プログラムとの関わりを振り返ってもらった。

Caroline A. Matano-Yang

ハワイ・オアフ島生まれの日系2世。父は西本願寺派の僧侶。スミス・カレッジ卒業後、国連本部に勤務。ミシガン州立大学で修士(Educational Administration)。1972年、日米教育委員会交流部長、翌年から事務局長を務める。

私が初めてフルブライト・プログラムに出合ったのは、主人がフルブライターだったからです。台湾で講義をすることになった主人の Fulbright Spouse として参加させていただきました。1年間台湾に滞在して、それが初めて外国に住む体験になりました。

日本には71年に主人の転勤で来ました。日本で何かやりたいと思っていたところ、ちょうどフルブライトで留学のためのカウンセラーを募集していると聞いて、この事務所(JUSEC)を訪ねました。

最初は週に2、3回ボランティアで来ていたんですが、翌年の5月になって、アメリカ人の前任者が帰国したので交流部長として「正社員」になりました。事務局長になったのは72年5月です。

その当時はフルブライト・プログラムはなくなるんじゃないかという噂があったほど、きびしい時期でした。というのは、アメリカ政府の69年度予算でフルブライト・プログラム全体の予算が半分にカットされたんです。日本のフルブライト・プログラムでも、数年前まで100万ドルを超えていた予算がいきなり40万ドルに減り、スタッフも25人が15人にカットされました。

私が入ったときでも、予算はまだ100万ドルに届かない、小さなプログラムでした。79年になって、日本政府

がアメリカ政府との協定で、フルブライト・プログラムの経費をフィフティ・フィフティで負担することになりました。プログラムが始まって28年目でようやく日本政府が拠出金を出すことになったんです。それからは予算はどんどん伸びていきました。それが、この20年間の第一のターニングポイントでした。

もう一つのターニングポイントは、フルブライト・プログラム30周年を迎えた82年に同窓会を結成したことです。同窓会の存在がなければ、現在のプログラムはもっと小さくて、そのイメージやprestige、影響力はかなり違っていただけないかと思います。もちろん予算面でもずいぶん貢献していただいています。同窓生の皆さんはよくご存知ですが、82年からスタートした募金は年を追って増えて、93年には1億5000万円という額になりました。

この10年間は、同窓会のおかげでプログラムが大きくなって、いろいろな新しいことができたんです。たとえば、10年前初めてアメリカ側からも Non Academic Professional の人がプログラムに参加できるようになりました。日本側は最初から社会人も、大学院生のカテゴリーで、応募することはできましたが、アメリカ側は最初ほとんどが大学院生、それから大学教員でした。その

梓を Practicing Lawyer, Businessman, Journalist, 建築家など学界以外の人たちにも広げることができたんです。

また、Recent B. A. Program という新しいプログラムを3年前からスタートしました。Recent B. A. つまり、アメリカの学部を卒業したばかりで、日本語や日本を勉強したいという優秀な若手を招くプログラムです。これも同窓会のおかげです。初年度は8人、去年は7人、今年ももっと増えると思います。というのは、同窓生の寄付はなるべく若い人に使いたいという意向があるからです。以前は Ph. D や研究員の方をサポートしていましたが、これからは若い Recent B. A. がより望ましいと思います。

ただ年次総会を開くだけの同窓会なら他の国にもありますが、このように寄付を募って、しかも、そのお金でアメリカ人を招いているのは日本の同窓会だけじゃないでしょうか。フルブライト元上院議員がよくおっしゃるんです、「どうしてドイツもフランスも日本の同窓会のようなことをしないのかな」と。日本人の国民性というか、「恩返し」という考え方がユニークですね。「恩返し」というと、企業に募金にいても通じるんですね。企業のトップの方々も、戦後にフルブライト・プログラムが果たした役割のことをよくご存知ですからね。

同窓生の間でも、同窓会ができたことによってネットワークができたと思うんです。よくいわれますが、日本の社会はタテ社会で、ヨコのコンタクトがとてもむずかしい。とくに企業と学界のつながりが弱い。ガリオア・フルブライト同窓会を通じて、同窓生自身が輪を広げることができたのではないのでしょうか。

ただ、日本の社会でも世代交代が進んでいます。それにどのように対応していくかが、私の後任者、そしてこれからの同窓会にとってのチャレンジだと思います。若い世代の同窓生に、どうやって関心をもってもらうか、どうやって同窓会の活動に参加していくのか、が課題に

竹村健一氏をゲストに 1993年度総会開く

ガリオア・フルブライト東京同窓会の1993年度同窓会は、93年4月21日、東京・丸の内の日本工業倶楽部で約170名の同窓生、関係者が参加して開かれた。

総会議長に渡邊宏同窓会長を選出して議事に入った。会長挨拶では、同年5月にワシントンで開催されることになっていたフルブライト上院議員の88歳誕生日記念晩餐会に、東京同窓会からも参加を招請されていたので、1万ドルを寄付し、当日滞米予定の川村茂邦前東京同窓会長ほかが代表として出席することが承認された。

次いで、フルブライト記念財団の全国理事会に出席さ

なります。

かつてのフルブライターたちはジェネラリストでした。学位を取るためではなく、アメリカを知るためにアメリカに行ったのです。もちろん研究者もいましたが、実際に Ph. D を取る人はあまりいなかった。ほとんどの人が1年くらいの短い滞在で、アメリカを広く見てきました。

最近ではスペシャリストの時代ですね。研究者も社会人もみんな専門的になっています。たとえばジャーナリストのリサーチ・テーマといえ、以前は「日米関係」ばかりでしたが、最近では「ヘルス・サービス」とか「環境問題」とか、専門的なテーマが多くなっています。

そういう世代の人たちが、同窓会の年次総会に来てもずっと年齢が上の人ばかりでおもしろくない、ということになりますね。だから、一つのアイデアとして、同窓会にも分科会を設立してみようではないでしょうか。たとえば、ジャーナリストとか、法律関係の方とかの職業別、分野別の分科会なら、若い世代にとってはその道の先輩に会える機会になりますね。そのような分科会だと、若い人が参加しやすいと思います。(聞き手・西岡一正)

◎新事務局長にシェパード氏を選任

日米教育委員会 (JUSEC) では、3月末で退任するカロライン・又野・ヤン事務局長の後任に、サムエル・M・シェパード氏を選任した。新事務局長は公募され、日米両国からの応募者180名のなかからシェパード氏が選ばれた。就任は4月1日。

シェパード氏は現在、米国・シアトルにある非営利の学校法人 American Cultural Exchange の副会長で、シアトルの日米協会の活発なメンバー。幼少期から高校時代まで日本で育ち、フルブライターとして来日したこともある。また、平和部隊 (Peace Corps) のボランティアとして韓国に滞在した経験もある。

れた、東北から九州までの各地区同窓会長が紹介された後、1992年度会務報告、会計報告、1993年度予算が原案通り承認された。

第3回個人募金状況については、小西輝明副会長から、東京同窓会では、943名により総額2357万円、全国では1746名により4042万円にのぼったことが報告された。

引き続き、長い間同窓会のお世話をしてくださった池田政利前事務局長に対し、参加者全員の盛大な拍手のうちに、渡邊会長から感謝状が、小山八郎名誉会長から記念品がそれぞれ贈呈された。

講演の部では1953年フルブライト同窓生であり、テレビなどでおなじみの評論家・竹村健一氏が「新しい世界



1993年度総会で「双方向化社会」の到来について語る竹村健一氏と日本」と題して講演した。

竹村氏は、これからの新しい時代の3つの特徴として“Understanding Business”が盛んになること、情報化社会からより情緒を重んずる「感性社会」へ移行すること、さらに情報の一方的な発信から、受信側も送り手になる「双方向化時代」になるだろう、ということをも具体例を挙げながら、わかりやすく話された。

その後、参加者の質問に答えて、円高についてはすでに92年末の段階で予想されたこと、これ以上円高が進んでも日本にとってメリットは少なく、今後はむしろ円安のすすめを提唱していることなど、世界の最新情報を交えながら、興味深い講演をされた。

講演会終了後、懇親会に入り、竹村氏や在日米大使館広報・文化交流局長のポール・P・ブラックバーン公使、日米教育委員会のカロライン・又野・ヤン事務局長ほか、多数の招待者を囲み、同窓生どうし旧交を暖めるとともに、新しい友人をつくりながらひと時を過ごした。

(正野敏夫)

1993年度役員名簿

名誉会長	小山八郎	
会長	渡邊 宏	
副会長	田中哲男(会長代理)、行天豊雄、平野龍一	
	小西輝明、松原亘子、高澤廣茂、安 成子	
監査役	堀 憲明	
		担当副会長
Foundation Liaison	委員長 堀江 昭	小西輝明
Alumni Meetings	委員長 上田俊男	安 成子
	副委員長 正野敏夫	
Hospitality	委員長 久世 篤	高澤廣茂
	副委員長 三上紀史	
Publicity	委員長 西岡一正	行天豊雄
Administration	事務局長 加藤弓弦	田中哲男

ガリオア・フルブライト東京同窓会 1992年度決算および1993年度予算案

1992年度決算

収入の部	前期繰越	9,160,308
	寄付金	70,000
	会費	5,036,000
	受取利息	180,437
	受取手数料	1,000,000
	雑収入	42,351
	合計	15,489,096
支出の部	給料手当	1,847,512
	会議費	270,571
	旅費交通費	293,110
	通信運搬費	856,254
	事務用品費	171,125
	印刷製本費	2,911,042
	貸借料	389,280
	謝礼金	—
	委託費	145,593
	書籍調査費	—
	支払手数料	13,709
	交際費	393,250
	什器備品	890,293
倉庫料	8,498	
会費等	4,000	
雑費	53,176	
	予備費	—
	合計	8,247,413
収支残高		7,241,683

1993年度予算

収入の部	前期繰越	7,053,275
	会費	5,000,000
	受取利息	100,000
	受取手数料	3,750,000*1
	賃貸料	240,000*2
	合計	16,143,275
支出の部	通常支出	6,581,000
	給料手当	1,200,000
	臨時雇手当	840,000
	会議費	268,000
	旅費交通費	304,000
	通信運搬費	1,476,000
	消耗品費	182,000
	印刷製本費	890,000
	貸借料	130,000
	諸謝金	—
	委託費	392,000
	支払手数料	13,000
	交際費	358,000
雑費	28,000	
予備費	500,000	
臨時支出	500,000	
募金趣意書	—	
什器備品	500,000*3	
	合計	7,081,000
次期繰越		9,062,275

*1 財団からの募金手数料 *2 財団からのコンピューター賃貸料 *3 コンピューター関連費用

92年度寄付総額は1億8000万円に

——第3回個人募金は4000万円

1992年度の同窓会に依るフルブライト財団奨学生の為の募金額は1億8,723万円と過去最高の額になりました。これは1991年度より約7,200万円多い金額です。1992年度の募金額が多かった理由は二つあります。その一つは、フルブライトプログラム40周年記念事業と第3回同窓会個人募金がこの年に行われたことで、この二者による募金額は5,658万円になります。その二つは、九州同窓会に依る4年毎の募金がやはりこの年に行われたこと、YKKとモービル石油が翌年分の寄付金を一緒に下さったことで、これらの合計は3,145万円になります。

上の二つの臨時的寄付金を除くと、1992年度の募金額が1991年度よりも少ないことに気づかれると思います。これは昨今の経済情勢悪化の為にこれまで継続的に御寄付下さっていた企業の中に本年は寄付中止をされた所があるからで、この傾向は1993年度の募金にも継続されると思われます。

第3回個人募金結果 (地区別件数と金額)

地区	会員数 (名)	募金者数 (名)	募金額 (円)
北海道	90	41	690,000
東北	167	86	1,950,000
北陸	52	27	550,000
東京	3,023	943	23,574,000
中部	276	84	1,595,000
京滋	272	92	1,942,340
大阪	486	178	3,821,000
中国	145	71	1,550,000
四国	64	22	370,000
九州	196	86	2,080,000
沖縄	187	111	2,110,000
国外	536	5	190,000
不明	125		
死去者	548		
総数	6,167	1,746	40,422,340

第3回個人募金の御礼

全国のガリオア・フルブライト同窓生の皆様による第3回個人募金の総額は別表の通り4000万円余りとなりました。いままで個々にお礼を申し上げませんでしたので、ご協力下さいました皆様にここに厚く御礼申し上げます。

ガリオア・フルブライト全国理事会会長 渡邊 宏
フルブライト財団 理事長 小山 八郎

なお、1992年度も別表の通り企業及び地区同窓会等からも寄付金を頂き、別表のような1993年度財団奨学生を迎えることが出来ました。東京同窓会事務局長 加藤弓弦

1992年度企業等募金結果 (単位 千円)

種類	企業名	金額	合計
経常的 寄付金	カーギル N.A.	5,000	130,650
	大日本インキ化学	5,000	
	GF 中部同窓会	300	
	高橋産業経済研究所	5,000	
	国際経済交流財団	10,000	
	モービル石油(1)	5,000	
	国際経済交流財団	10,000	
	トヨタ自動車	5,000	
	小松製作所	5,000	
	味の素	5,000	
	日本興業銀行	5,000	
	三菱グループ	5,000	
	住友グループ	5,000	
	東京ゴルフ大会	10,300	
	GF 東北同窓会	3,600	
GF 九州同窓会*1	20,000		
モービル石油(2)*2	1,450		
富士銀行	5,000		
吉田工業 (YKK)*3	20,000		
臨時的 寄付金	40周年記念事業	16,944	56,582
	第3回個人募金	39,638	
合計			187,232

*1: 4年分 *2: 翌年分 *3: 2年分

◎フルブライト氏の88歳誕生日を祝う

フルブライト・プログラムの生みの親、フルブライト元上院議員の88歳誕生日の祝賀会が93年5月5日、ワシントンD.C.のANAホテルで開催された。

この祝賀会は米国のフルブライト同窓会が主催したもののだが、日本ガリオア・フルブライト同窓会も1万ドルを拠出し、川村茂邦・前東京同窓会会長夫妻が出席した。ほかに日本関係者では、林啓一郎ニューヨーク同窓会会長、二瓶恭光・慶応義塾ニューヨーク学院長(元東京同窓会副会長)、栗山駐米大使らが出席した。

祝賀会はデルーシア米国同窓会会長の挨拶で始まり、ゴア上院議員(ゴア副大統領の父)らが祝辞を寄せたあと、オペラ歌手アンナ・モフォの歌唱など、多彩なプログラムが繰り広げられた。

若いころにフルブライト氏の事務所働いたことがあるクリントン大統領も特別ゲストとして出席した。大統領はスピーチの中で、「日本はフルブライト・プログラムのもっとも強力な支持者となっており、われわれはこれに対して大いに感謝している」と述べ、日本関係者に感銘をあたえた。

*

なお、フルブライト氏は祝賀会からしばらくして入院されましたが、その後快方に向かわれ、3週間ほどで退院されました。

米大使が交代、歓送迎会を開催

駐日米大使の交代にともなう歓送迎会が、フルブライト同窓会と日米協会の共催で行われた。

離任するアマコスト氏の歓送迎会は昨年7月、ホテルオークラで開催され、同窓会関係者約130人が出席した。



席上、渡邊宏東京同窓会会長から、フルブライト・プログラム40周年を記念してつくられたフルブライト氏の署名入りのネクタイ、トレーナーなどが記念品として贈呈された(写真上)。アマコスト氏はこれに応じて、自身がフルブライターとしてドイツに留学した思い出を披露するなど、なごやかな送別の会となった。

一方、新任のモンデール大使の歓送迎会は昨年11月30日、全日空ホテルで行われた。元副大統領という大物大使の赴任とあって、1000人近い出席者が会場を生めた。同窓会関係の主席者は約160人を数えた。

スピーチに立ったモンデール氏は、日本からの米国留学生数が米国人の日本留学生数の10倍以上にのぼるといふ統計を知って、ショックを受けた経験を明かし、教育・交流を通じて日米の相互理解をより深めることの重要性をあらためて力説した。(写真下=ともに日米協会提供)

1993 FULBRIGHT FOUNDATION GRANTEE LIST

NAME	DISCIPLINE/TOPIC	GRANT
RESEARCHERS (5)		
Mr. FUNK, Jeffrey L.	Business Management & Admin.	Nissan Motors
Mr. KAPLAN, David E.	Journalism	Japan Economic Foundation
Mr. KNEZEK, Gerald A.	Education	IBM Japan
Mr. MAKINS, James D.	Ceramics	Komatsu
Mr. SHRIBASTAVA, Paul	Business Management	Mitsubishi Group
STUDENTS-Ph.D. candidate & Professionals (12)		
Mr. ALTBACH, Eric G.	Political Science	Fuji Bank
Ms. ANGUST, Linda I.	Cultural Anthropology	Japan Economic Foundation
Mr. ATKINS, Everett T.	Japanese History	Dainippon Ink & Chemicals
Mr. GEORGE, Timothy S.	Japanese History	Takahashi Zaidan
Mr. HEINRICH, Lawrence W.	Political Science	Ajinomoto
Mr. LANE, David W.	Political Science	Industrial Bank of Japan
Mr. LIPPIT, Seiji M.	Japanese Literature	General Alumni Fund
Ms. McSWEENEY, Elizabeth J.	Sociology	Japan Economic Foundation

Mr. NUSS, Steven R.	Musicology	YKK
Mr. RICHTER, Giles M.	Japanese History	Toyota
Mr. SZYMKOWIAK, Kenneth F.	Sociology	Sumitomo Group
Ms. WELCH, Patricia M.	Linguistics	Japan Economic Foundation
STUDENTS-Recent B.A.s (7)		
Ms. HARMAN, Tanya R.	Education	General Alumni Fund
Ms. IGARASHI, Mitsuko	Political Science	Tohoku GARIOA/Ful. Alumni Assn.
Mr. LURIE, David B.	Japanese Literature	General Alumni Fund
Mr. MAYWAR, Drew N.	Physics	General Alumni Fund
Mr. McMAHAN, Gregory	Chemical Engineering	Shino Fund
Mr. RAY, Brian E.	Philosophy	General Alumni Fund
Ms. RICHTER, Gretchen L.	Interculture Communication	General Alumni Fund
JAPANESE STUDENTS (3)		
Ms. KIYOTAKI, Sonoko	Law	Mobil Sekiyu
Ms. TSUDA, Yumi	Political History	YKK
Mr. YAMADA, Masaru	Aguriculture	Cargill North Asia